



話 童

# お 蕪 様

水 谷 年 恵 子

昔々えらいお坊さんがありました。御飯の時、蕪を一口食べて、

「お蕪様、お蕪様」。

と褒めました。すると小僧さんが、

「あは は は は」。

と笑ひました。お坊さんは、又一口蕪を食べて、

「お蕪様、お蕪様」。

と褒めました。すると小僧さんは又、

「あは は は は」。

と笑ひました。けれどもお坊さんは蕪を一口食べる度に、

「お蕪様、お蕪様」。

と言つて、皆食べてしまふまで蕪を褒めることを止めませんでした。小僧さんはお坊さんに、

「蕪がお蕪様なら、大根は何ですか」。

と尋ねました。お坊さんは、

「お大根様だよ」。

と答へました。小僧さんは眼を圓くして、

「へえー、お大根様ー、ぢやあ芋や菜つ葉は？」

と尋ねました。お坊さんは、

「お芋様にお菜葉様」。

と答へました。小僧さんは少し不平さうに口を尖

らせて、

「それなら、私は小僧ぢやありません、お小僧様です」。

と言ひました。お坊さんは、

「ちがふ、ちがふ、お前は小僧だ」。

と言ふと、小僧さんは怒つてしまつて、

「蕪なんか何だ。蕪の馬鹿、馬鹿のどんまの蕪やあい」。

と叫びました。お坊さんはお勝手へ行つて、葉っぱの着いた眞白な蕪を一つ持つて来て、小僧さんの鼻の先へ出して。

お坊さん「小僧、お蕪様に向つて、も一度言つて見ろ」。

小僧「蕪の馬鹿。蕪のどんま、どんまの馬鹿の腐り蕪やあい」。

お坊さん「お蕪様、小僧があなたの事を、どんまの馬鹿の腐蕪やあいと申しましたよ。お腹は

立ちませんか」。

蕪は何とも言はずに、眞白な色をして、平べつたいまあるい形をして、青々とした葉つばを着けてをりました。

お坊さん「やつぱりお蕪様はおえらい。ほんとにお蕪様だ」。

これを聞いた小僧さんは、なほく怒つて、蕪に噛み附いて、蕪の體中を齧つて、お坊さんの足下へ投げ附けました。お坊さんは、

「お蕪様、ひどい目にお遭ひになりましたね、さぞ痛いでせう」。

と言ひましたが、蕪は、「痛い」。とも、「悲しい」。とも言ひませんでした。

此のお坊さんが此の小僧さんを連れて、或時旅に出掛けました。山の中で道に迷つて、どつちへ行つてよいか分らなくなりました。あちらこちら草木の間を歩き廻りましたが、兎の通つたやうな

道さへも見附かりません。時々小鳥が「びい〜」。

と鳴いたり、嵐に木の葉が、さわ〜〜と鳴つたりしますが、何處まで行つても山ばかり、其中に日が暮れてしまつて、あたりが眞暗になりました。二人は山の中で石を枕にして寢ました。

夜が明けると、お坊さんは小僧さんと、又山の中をあちらこちらと歩き廻りました。もう二人とも疲れてしまつて、足が棒のやうになりました。

又日が暮れました。見ると向ふの方にぼつとりと一つ燈火が見えます。二人は、

「あら嬉しい。元氣を出して、あそこまで歩かう」。

と言つて、一足、一足、引きづつて行きました。

其處は貧しい獵人の小家でした。

お坊さん「もし、もし、道に迷つた旅人です。どうぞ一晩泊めて下さい」。

獵人「それはお氣の毒です。さあ〜お這入りな

さい」。

小家へ這入ると、小僧はぺこ〜のお腹をかへて、

「あ〜何か食べたいなあ」。

と言ひました。獵人は、

「お氣の毒ですが、此處には何にも食物がありません」。

と言ひました。小僧さんは悲しさうに小家の中を見廻しましたが、忽ち小家の隅つこに在る一つの蕪を見付けて、駈け寄り、

「お蕪様、お蕪様」。

と叫んで、兩手で其の蕪を差上げて、

「お蕪様です、お蕪様です」。

と言つて、お坊さんと半分づつわけて、

「お蕪様、お蕪様」。

と一口一口褒めながら食べました。